

天文用語に關する私見 (10)

(山 本 生)

“遊か、惑か？” (續き)

繰り返すやうではあるが、明治四十年のかの會合に出席した人々よ！「あの會合で此く此く定めたのだから」などと言ふことは今後お止し願ひたい。諸氏があの會合を今に至るも權威付けず、又其の内容も發表されないといふことは、諸氏があの會合の權威を棄權せしめられたわけなのだから。

つまり、今までにも自分は種々の機會に言つた通り、今日は我が天文學界に、眞に權威づけられた語彙といふものが決定してゐない“自由の時代”なのである。若し今まで何等かの形で此うした權威ある語彙が認められてゐるのならば、吾々は何を好んで新語新譯を作らう。喜んで先輩の決議に従ふ用意は充分に有つてゐるのである。

しかし、社會の進展と共に、天文學の權威ある日本語彙が必要であることは自分等は十數年來叫んでゐるのである。此の叫びを正しく聽かないで、只“明治四十年の會合”を徒らに振りまはされるのは、要するに老人が後輩を迷はせ惑はせるに過ぎない。

自分は、しかし、近いうちに必ず吾々の正しい聲が聞かれ、學術研究會議あたりに、權威ある、マジメな天文學術語調査會が組織される日の來ることを信ずるものである。(此の調査會には、天文學者と、アマチュア代表者と、國語學者と、漢學者と、西洋語學者と、數學物理其の他の理學者と、文筆家中の代表者と——これだけの多方面の人々が網羅せられることを希望する。若し此うした調査會を學術研究會議あたりが組織せず、いつまでも文書界を焦らせる場合には、いつまでも此のまゝ待つてはゐられないのだから、止むを得ず、吾が東亞天文協會あたりが主催して之れを組織しなければならないと思ふ。) 之れが組織されたならば、其の席上、いろいろな提案がなされることであらう、此の提案の準備の意味で、自分は過去十數年來いろいろの考へを練り、又、いろいろ實行して見て、一般讀者の意見を聽いてゐるのであ

る。——こうした目的のため、自分は過去二十年間、かなり多くの新語を試作した。又、一旦、定めた語をも、後にモツと良い語が思ひ付けば、ドシドシ改めることにしてゐる。自分は、今日が天文語學上の無政府時代であると信じる故に、出来るだけ自由に天文用語の研究し、新語を態々試作し、毎日々々、より良い日本語が無いものかと、諸書をあさり続け、考へ續けてゐる。讀者よ、若し諸氏が自分の今までに出版した書物や文書を比較されるならば、同じ原語に對して、自分が時々いろいろと違つた日本語を使つてゐる事實を見られるであらう。之れは自分が態々やつてゐるのである。そして、皆、他日組織されるべき天文用語調査會の參考にしたい心組みなのである。例へば

「星雲」を「星霧」として見たり	} 是等は新作でない、明治初代に用ゐられたものである。
「隕石」を「隕星」として見たり	
「科學」の代りを「理學」としたり	
「變光星」を「變星」として見たり、	
「プルイト」を「冥王星」としたり、	
「彫刻室」を「アトリエ」としたり、	
「海蛇」を「ヒドラ」と改めたり、	
「セフェウス」を「セフェ」としたり	
「印度人」を「インデヤン」としたり、	
「望遠鏡」を「とうめがね」としたり、	
「テーブル山」を「ひらやま」としたり	
「畫架」を「えかけ」と改めたり	
「南魚」を「みなみうを」としたり	

其他、いくらもある。

讀者よ、自分の意のある所を深く味つて貰ひたい。

さて本論に立ち歸つて、Planet の問題であるが、もともと之れはギリシヤ語の Πλανης から來た語であつて、一般恆星 (Fixed stars) が、天球上の一定點に固定してゐるに對し、「うごく星」、「固定してゐない星」といふ意味のものである。従つて、昔は太陽や月なども planet の中に入れて、火水木金土と共にし、此の七つ星を同様に取り扱つたのであつて、何もわざわざ浮浪する星とか、惑ふ星とかいふ風に變な意味に取る必要はないのである。「遊星」は實は此の意味に於いて良い語である。「遊」を「あそぶ」といふ意味にのみ

解するのは小學生程度の常識に過ぎない。「遊」には「固定しない」「うごく」といふ意味が堂々と認められ、昔しから其の意味に用ゐられてゐる場合は非常に多い。「遊學」といふ語を見て「あそんで學問する」と解したり、「遊標」を「遊んでゐて、つまり役に立たない目標」と解したら、笑はれ者である。之れ等は正しく「故郷から他所へ出かけて行つて勉學すること」「うごく目じるし」と解すべきである。しからば、「うごく星」のために「遊星」といふ語はつまらない聯想の無い最も優秀な譯語と言つてよからう。尤も「惑星」も多少のとりえはある。しかし之れは「惑」といふ字の意味が惡^{ワル}どくて、いかにもわざとらしい特殊な聯想を誘ふ語である。但し、東洋でも西洋でも、昔し、一時はかの星の運動を見て、あれは星が一定の軌道のない放浪者であると考へた人があるにはあるらしいが、何も其れを取り立てて、殊に天體運行論の確立した現代に、ジョウダンにも、「星が惑つてゐる」と思はせるやうな「惑星」を用ゐるのは、却つて人々を惑はせるもので、罪な話である。

しかし、若し「遊星」が誤譯であつたり、何も知らない者の新造語であつたりするのならば、自分は潔く之れを棄てて、「惑星」を探るにやぶさかでない。

聞くが如くんば、平山清次博士も、他の二三の博士たちも、元來は「遊星」に賛成してゐられるのであると云ふ。それならば、元々かの明治四十年の會合は吾人を決してこだわらせる權威者ではないのだから、善くない語はドシドシ改めて、「遊星」を採用されては如何？（つづく）

謹 告

今般下記の方々より奇篤なる寄附を受けました。茲に之を發表して夫々の御芳志に對し深謝の意を表します。

十月九日

金 五 拾 圓 也

會員 在ブラジル・アリアンサ

栗原自然科學研究所 代表者 神屋信一殿

十月十二日

金 四 拾 圓 也

會員 大阪府西野田

大口周作殿

東 亞 天 文 協 會